

くまもと文学・歴史館

人間の物語、浮かび上がるように 新館長・服部英雄さん着任 / 熊本

毎日新聞 2016年4月15日 地方版



日本中世史研究者の服部さん

熊本近代文学館から模様替えした熊本市中央区出水の「くまもと文学・歴史館」の新館長に、著書「河原ノ者・非人・秀吉」（山川出版社）で2012年の毎日出版文化賞を受けた日本中世史研究者、服部英雄さん（66）が着任した。【福岡賢正】

服部さんは名古屋市出身。東大大学院の修士課程を修了後、文化庁に16年間勤め、城や荘園など全国の中世遺跡の調査に携わった。その経験から「あるき、み、きく歴史学」を提唱。前職の九大教授時代も現場に足を運んで地名や古老の話などから文献には残されていない歴史を掘り起こしてきた。「文献史料は特定の立場の人が特定の利害に基づいてつくったもので、残り方が偏っている。史料を広く、複眼的に見るには、現場から考えることが必要」と説く。

その真骨頂が「河原ノ者・非人・秀吉」。各地の地名を手がかりに、差別された人々の動きを中世までさかのぼって探り、彼らが社会にとって不可欠な役割を果たす姿を描いた。その成果を基に豊臣秀吉にまつわる史料を洗い直し、秀吉が路上生活の境遇からの上がったことや、秀頼が秀吉の実子ではなかったとの説を展開した。現在も各地の太鼓の胴の中に残る墨書から歴史をたどる研究のまとめを行っている。

そんなフィールド派の手腕を買われ、3月には「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界文化遺産登録への再挑戦を目指す「長崎世界遺産学術委員会」の委員長にも就任。禁教期の隠れキリシタンの物語に各遺産を関連づけた推薦書案をまとめてきたばかり。これで天草市の崎津集落の重要性がさらに増したと言う。

「前身の近代文学館が積み上げてきた30年の蓄積を大切にしながら、さまざまなやり方で人間の物語が浮かび上がるような歴史の展示にも挑戦したい」と意気込む。